

これまで岡山県で実施してきた「リスクコミュニケーション」の取組

平成 14～15 年	講演会とパネルディスカッションの開催 大規模な会場で会を実施し、正しい知識を幅広く普及啓発した。 (課題) 一方的な情報提供になりがちであった。
平成 15～18 年	視察型研修、意見交換会の実施 県が主催し、親子を対象とした生産現場や工場の見学を実施 地域住民・生産者・製造者などを集めて意見交換会を実施 (課題) 参加者は主に参加するだけだったので、参加後の意識変化や波及効果が分からなかった。行政からの一方的な情報提供になりがちであった。
平成 19～21 年	検定の実施とリスクコミュニケーターの登録 県民が食に関心を持ち、知識を深める動機付けとして「検定一晴れの国おかやまの食ー」を実施 検定の上位合格者の中から、希望者をリスクコミュニケーターとして登録
平成 19 年～	リスクコミュニケーターの育成 リスクコミュニケーターが地域におけるリスクコミュニケーションの中核を担えるよう、正しい知識や科学的な考え方、コミュニケーション能力の向上について研修を行った。 (課題) 登録から 10 年が経過し、事業に参加するケーターが減少している。ケーターの知識は蓄積されているが、そこから地域への波及効果に疑問がある。
平成 24 年～	リスクコミュニケーター主体の視察型研修会、意見交換会の実施 リスクコミュニケーターが企画・運営し、県がサポートする形の研修会を実施。 (課題) 企画・運営を行えるケーターは少数であり、活性化しない。視察型研修会は、工場見学で終わってしまうことが多い。

「リスクコミュニケーションとは?」、「これまでの取組の詳細」については、別添資料をご覧ください。

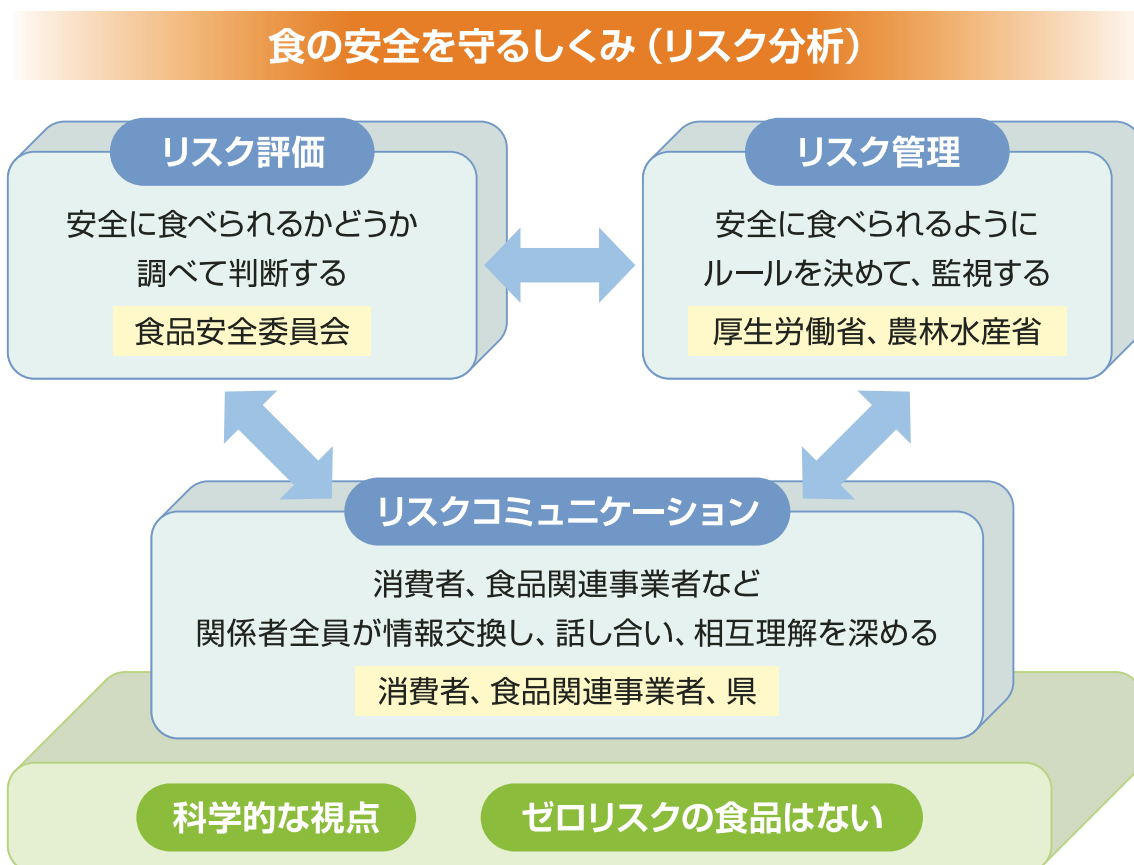
1

リスクコミュニケーションとは

これまで築かれていた食に対する信頼は、近年、さまざまな食に関する問題や事件が起こるたびに大きく揺らいでいます。昨年もレストラン等でのメニューの食材偽装問題や、冷凍食品に農薬が混入される事件が発生し、食に対する不安や不信につながっています。いつでも安全な食品を自由に手に入れることができるわが国で、食に対して不安や不信を持たないといけないということはとても残念なことです。

食に対する信頼を取り戻していくためには、リスクコミュニケーションが重要な要素となります。リスクコミュニケーションの目的は、消費者と食品関連事業者と行政とが互いに情報交換し、話し合い、相互理解を深めることであり、関係者が自分の立場で意見を主張し合うだけでは、本当のリスクコミュニケーションにはなりません。そして、リスクコミュニケーションは、「科学的な視点」と「ゼロリスクの食品はない」という考え方に基づいていることが大切です。

事故や問題を未然に防ぎ、食の安全を守るしくみを「リスク分析」と言います。リスク分析は、「リスク評価」と「リスク管理」、そして「リスクコミュニケーション」で構成されています。



リスク評価とは、ある物を食べ続けたときに私たちの健康にどのような影響があるかを調べることです。リスク管理とは、リスク評価で明らかになった食品のリスクをどのように制御していくかということです。

このリスク評価やリスク管理は、「科学的な視点」に基づいて行われます。これは、誰に対しても客観的に説明でき、理解できる必要があるからなのです。

また、食品のリスクは[人の健康への悪影響の確率] × [重篤度] で表されます。確率は、食べる頻度や量によっても変わってきますし、確率が低くても、健康への影響の重篤度が高ければ、リスクは高いということになります。塩分や油でも取りすぎれば健康への影響があるように、「ゼロリスクの食品はない」のです。

確かにリスクの考え方は、専門家だけがわかる難しい内容というイメージがあるかもしれませんが。そのため、リスクコミュニケーションを行っても、結局、危険か安全かという両極端な結論になりがちです。しかし、私たちの健康を守るための最も効果的な考え方を導くためには、やはり、「科学的な視点」と「ゼロリスクの食品はない」という考え方に立って話し合うことが必要なのです。

食品のリスクは、低ければ低いほどいいと考えるのは当然の話ですが、健康に影響がないレベルよりも低くする意味はありませんし、リスクに対する過度な反応は、私たちの食品の選択を狭めてしまいます。

また、科学的な視点に基づいて考えれば、食材偽装などの問題で、食品の安全性に対して過度の不安感を持つ必要もなくなりますし、今後発生するかも知れない新たなリスクに対しても様々な情報に惑わされずに、冷静に判断することができます。

これからの食に対する信頼を確立し、安心の定着につなげていくために、リスクコミュニケーションを続けていく必要があると考えています。

講演会とパネルディスカッションの開催（H14～15年度）

岡山県では、平成14年から食の安全・安心に関するリスクコミュニケーション事業を進めてきました。平成14～15年度は、「食の安全を考える県民の集い」と称して、大規模な講演会とパネルディスカッションを組み合わせで開催し、食の安全・安心のあるべき姿について、いろいろな立場の方の考え方を幅広く普及啓発していきました。

食の安全を考える県民の集い

平成14年度（岡山県立大学（総社市））

基調講演「スローフードのすすめ」

講師：國本 桂史（日本スローフード協会理事長）

パネルディスカッション「安全を、美味しく、楽しむために」



パネルディスカッション

平成15年度（グリーンヒルズ津山リージョンセンター（津山市））

基調講演「食と農を近づけるために」

講師：中村 靖彦（内閣府食品安全委員会委員）

パネルディスカッション「食の安全・安心の推進－地産地消のすすめ－」



基調講演

視察型研修会、意見交換会の実施（H15～18年度）

平成15～18年度は、「食の安全・安心探検隊」「食と産を結ぶ地域の会」と称して県等が主催してリスクコミュニケーション事業を行いました。

「食の安全・安心探検隊」では、野菜、牛乳、お菓子などをテーマに、県内の親子を対象に、生産現場、製造・加工現場、流通・販売現場、食品検査施設などの見学や体験を通して、食の安全確保の取組み等について学んでいただきました。

「食と産を結ぶ地域の会」では、生産者、製造・加工者、消費者、行政などの立場が違う人たちが、「食」に関する意見交換や情報交換を行い、お互いの考え方について理解を深めていただきました。



食の安全・安心探検隊



食と産を結ぶ地域の会

2 これまでの岡山県のリスクコミュニケーションの取組み

検定の実施とリスクコミュニケーターの登録（H19～21年度）

平成19～21年度にかけて、「検定－晴れの国おかやまの食－」を実施しました。県民のみなさんが食に関心を持ち、知識を深める動機付けとして、食に関する知識を問う検定を実施しました。

この検定の上位合格者の中から、地域におけるリスクコミュニケーション推進の中核を担うリスクコミュニケーターとして、県に登録をしていただきました。



検定－晴れの国おかやまの食－

リスクコミュニケーターの育成（H19年度～）

リスクコミュニケーターの方々には、コミュニケーション能力と食の知識の向上を目的として育成研修を受講していただくとともに、実際のリスクコミュニケーションとして、ワークショップ型（グループ形式の意見交換）やサイエンスカフェ型（全員参加型の意見交換）の意見交換会や生産地、製造工場などを見学し、意見交換を行う視察型研修などに参加していただきました。



育成研修

リスクコミュニケーター主体の視察型研修会、意見交換会の実施（H22年度～）

平成22～23年度には、育成研修を受講したリスクコミュニケーターが会場設営や司会、グループ作業の進行役などを担った意見交換会が開催されました。

さらに、平成24年度からは、リスクコミュニケーターが意見交換会や視察型研修会などを企画し、運営をしていただく形でのリスクコミュニケーションを進めています。



リスクコミュニケーターが運営した意見交換会



リスクコミュニケーターが企画、運営した視察型研修会

これからのリスクコミュニケーションの取組み

岡山県では、リスクコミュニケーションの取組みを始めて約10年が経ちます。当初は、少しでも多くの方に集まっていただくことを目的にイベント的な事業を推進していました。しかし、参加者が多いと一方的な情報提供になりがちで、参加者間の意見のやり取りなどが難しくなります。このため、小規模な地域単位の意見交換会や視察型研修などの実施へ転換を図ってきました。

今後、食の安心の定着を広げていくためには、意見交換会や視察型研修などの参加者から、さらに他の方に連鎖的にリスクコミュニケーションが広がっていくことが求められます。このためには、様々な属性や立場のリスクコミュニケーターが主体となって進める多様なスタイルのリスクコミュニケーション活動が必要であると考えています。

岡山県は、育成研修、場の提供、広報、資料提供などに積極的に関わり、リスクコミュニケーターの活動を側面的に支援、促進していきます。